平和学から見た環境問題

郭　洋春

授業発足の経緯

「平和学から見た環境問題」。この一見奇異に聞こえるネーミングはどこから生まれたのか。この授業の主要メンバーは，本学経済学部名誉教授・久保田順先生の大学院時代の仲間である。久保田順先生の在職中はもちろん退職後も同メンバーは不定期的には集まり，お互いの研究成果の確認・共同研究の成果の公開を行なってきた。今回の，「平和学から見た環境問題」も2000年4月から「環境・平和研究会」を立上げたのがそのきっかけである。この研究会の趣旨は，環境問題を従来の自然科学・社会科学のフレームワークを乗り越え，新たなアプローチから検討しようというものである。そのため毎月1回立教大学で研究会を持ってきた。そして，1年間の研究会活動を通して見えてきた（得られた）研究の成果を，教育の現場で還元しようというところから始まった。

授業は，平和学から環境問題を捉え返すというものだが，そもそも環境問題を始め現代社会の多くの諸問題は，人々の日常生活に直接に関わっている部分と想像力・抽象力を研ぎ澄まさなければ理解できないものとがある。しかし，人間社会は相互に（複雑に）絡み合っており，全ての問題は我々個々人に関わっている。そのことを理解するフレームワークに「構造的暴力」概念がある。我々は暴力というと戦争をその典型とする直接的に被害をこうむるものを理解しがちであるが，実際の社会では間接的（構造的）暴力のほうが，多くの被害をもたらしていることが多い。環境問題はその最たるもので，放射線の漏洩による住民被害やゴミ処理場を巡る住民と行政・業者の対立など自らが汚染物を廃棄したわけではないにも関わらず環境破壊を受けるケースなどは正にそれである。こうした構造的暴力を解決するアプローチが平和学である。さらにその具体的解決のためのビジョンとして「サブシステンス」を提案した。

授業の運営方法・工夫

授業は概して3つのパートから構成されている。第1パート，講師陣によ

る講義。これは大体1人20～30分で講義を行なう。毎回，2～3人が話すので，最大でも60分となる。第2パートはBuzz Session。Buzzとはガヤガヤ騒いだり，ハチなどがブンブンいう，という意味である。従って，バズセッションとはその名の通り，参加者がワイワイ騒ぐ集まりということになる。具体的には，1班6～7人のグループを第1回目の授業で固定的に決め，講義の中から与えられるテーマに促して毎回同じメンバーで10～15分話し合うというものである。そして，議論終了後代表者が議論の纏めを黒板に書く。それを各講師がコメントしたり，議論の集約を図ったりするのである。そして第3パートでは，バズセッションの議論を踏まえ，各自の意見（別に授業の感想も）をレスポンスシートに記入する時間。これが大体10分前後である。受講者はレスポンスシート記入後，予め指定された班の封筒にレスポンスシートを入れて終了となる。

以上が授業の運営方法であるが，これとは別に授業の前後に講師陣の準備・打合わせが加わる。まず，各講師はその日回収したレスポンスシートを（授業が2時限目ということもあり）昼食を挟みながら読み，クエスチョンへの解答や感想にコメントを附し，チェック（各自のサイン）をして，封筒に戻す。この作業は，全員がレスポンスシートに目を通すので午後3時頃まで行なわれる。そして，次週の授業開始前に，レスポンスシートが入った封筒を教室の一番前の机に置いておき，受講生は来た順番から各自の班の封筒からレスポンスシートを持って席につく。ここで，レスポンス用の形式・趣旨を説明しておくと，レスポンスシートは，予め全授業分のクエスチョンと感想を書く欄を1枚のシートに作成しておき，学生は授業開始前に，決められた班の色の袋の中からレスポンスシートを持っていく。そして，当該授業の記入欄にその日のクエスチョンと感想を書き溜めていくというものである。これは，受講生がこの授業を通していかに理解が深まったか，が1枚のレスポンスシートで一目で分かり，さらに，自分の認識がどのように変わっていったのか，もその場で理解することが出来，さらには出欠席の管理も同時に行なえる，という利点がある。

また，1回の授業に複数の講師が参加することからMLを利用して，次回の授業内容の確認等を行ない，当日も20～30分前には集まり，最終的な打合わせを行なう。さらにこの授業の特筆すべき（変わっている）ところは，コーディネーターはもちろんその日，担当していない他の講師も授業に出席し，バズセッションなどに参加する，という点である（もちろん，彼らには講師謝礼は支払われていない）。その出席の割合は全講師（地方，外国在住の講師を除くと）の7～8割に上る

(実数にしても8～9人位出席していることになる)。殆ど，義務的状態で参加しているのである。こうなると，雰囲気的には受講生よりも，講師の方が多い（極端ではあるが）ような状態で授業が進められているのである。

授業内容

この授業は，環境問題の本質がどこにあるのか，を明らかにするというよりは，環境破壊に繋がる様々な要因，環境破壊の結果と思われる現象を明らかにすることにより，環境問題を単なる環境破壊として捉えるのではなく，平和を脅かす主要因として理解してもらう点に重点をおいて授業を展開した。そのため，この授業のキーワードである「平和学」とは何か，から始まり，次に環境問題に対する視点を共有し，平和学の実践課題である「サブシステンス」志向について様々な角度から講義した。特に，この授業は2002年度に開講2年目ということもあり，前年より準備してきた教科書を『環境を平和学する！』（法律文化社）というタイトルで出版した。その結果，受講生には授業内容での不足点を教科書で補うことも可能となった。ちなみに簡単に，授業内容（目次）をキーワードで紹介すると，サステイナブル・ディベロップメント，構造的暴力，グローバリゼーション，世界システム論，覇権安定論，リプロダクティ・ヘルス／ライツ，生殖医療，エコ・フェミニズム，オルタタティブ・トレード，NGOなどである。そして，これらアプローチの根底を貫いている概念は，サブシステンスという考え方である。サブシステンスとは「個と集団の本来性を発現させ，類として永続させる諸条件の総体」である。この実現のためには，構造的暴力――この授業では環境破壊がそれに当る――を排除し，世の中を平和な状態へと蘇生させていくことが重要なのである。この点が毎回の授業で繰り返し強調された。

なお，多岐にわたる授業を担当する講師陣は，大学の教員はもちろん，国際機関職員，NGO関係者，フリージャーナリストなど多士才々なメンバーである。

受講生の反応

受講生の多くは，この授業は環境問題を学ぼうと思って受講したが，前述した通り，実際には環境問題の内容そのものというよりは，環境問題に対する新たなアプローチを理解してもらうところにあるので，当初は戸惑いを隠せなかった受講生も回数を重ねるたびに，環境問題の深刻性，知ることの大切さを認識してきたと思う。それは，毎回のレスポンスシートの中身からも窺うことが出来る。一方，この授業には6人の立教高校生が受講していたが，最後までついて来ただけではなく，バズセッション，レスポンスシートでは大学生に負けず劣らず議論，コメン

トをしていた。こうした光景は我々講師陣にも刺激にもなったが，在校生にとって一番の刺激になったことであろう。

しかし，課題も多く残された。第一に，バズセッションのテーマが抽象的・非現実的で，短時間で議論するにはかなり難しいテーマとなってしまう傾向が見られたこと。その理由としては，毎回の授業のテーマが多岐に渡りすぎてしまった結果，そのテーマを結ぶバズセッションが抽象化・曖昧化せざるを得なくなってしまったこと。第二に，毎回２～３人の講師が講義をすることで，授業内容が広く浅くなってしまったこと。これは一方で，幅広く環境問題を理解することが出来た反面，特定の内容を深めるのには充分ではなかったという側面がある。特に，この授業の内容が受講生にとって目新しい内容である以上，もう少し内容を掘り下げても良かった感は否めない。この点は，今後全カリでこうした授業を展開していく際の教訓としていきたい。

全カリ授業としての「平和学から見た環境問題」

コーディネーターである私は，全カリが発足してからほぼ毎年何らかの形で全カリの授業に関わってきた。その中で，今回の「平和学から見た環境問題」ほど，全カリの授業とは何か，を考えさせられた授業はなかった。何故なら，第一に専門学部では招聘できないような職業の人を講師に招き，第二に授業内容も自分１人の力では到底できないような内容を設定することが出来，授業の運営方法も講師が複数存在することから多様な授業運営，工夫を展開することができるからである。逆にいうと，全カリ（特に，総合Ｂ群）を担当した以上，大人数授業だからできない，授業中私語をしたり，居眠りして授業にならない等は言い訳できない所まで自分を追い込んで授業を行なわなければならない（少なくとも私の場合）という，かなりの真剣勝負を求められる授業である。要するに，自分のやりたい授業ができる分だけ，失敗＝無味乾燥な授業は許されない、ということだ。従って，全カリを毎年数年に渡って継続するということは難しい。2，3年行なったら数年は休んで（新たな知識の蓄積や教育実践の方法を充電して）新装開講するのが，良いと考える。その間，他の教員がまた授業を展開すれば，全カリは常に新しい授業が開講される、ということになる。

こうした経験は，専門学部での授業にもプラスに作用している。確かに，専門学部の授業は教員１人によって運営されるので，全カリ（総合Ｂ群）ほどの多様性は追求できないが，そうした方向性を常に意識して授業を行なうようになってきているのは確かである。従って，私にとって全カリとは，教員としての私の教育のあり方を検証

してくれる場，ということができる。今後もこうした点を意識して，全カリと関わっていきたい。それが教員としての私の教育実践を向上させてくれると信じるからである。

カク　ヤンチュン
（本学経済学部教授，総合B群科目担当）